

イエスのことば 第32回

また、群衆を見て深くあわれまれました。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。そこでイエスは弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」（マタイ 9：36～38）

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 「承」の部において、イエスはメシアとしての権威を示し続けた。しかし、ついに指導者層は公式に、イエスをメシアではないと拒否した。
2. 指導者層による公式拒否を受けて、イエスの宣教活動に大きな変化が起きた。そのような変化には、二つある。しるしに関して、と、教え方に関して、である。
 - (1) しるしに関して
 - ① 今後、イエスがメシアであることを示すしるしとしてイスラエル民族に与えられるのは、「ヨナのしるし」のみである。ヨナは死んで 3～4 日によみがえった預言者（ヨナ 1：17）。ヨナのしるしとは、死後 3～4 日によみがえるか、復活する奇跡を意味する。聖書の中で、ヨナのしるしは、3 回起きる。
 - 第 1 回 ラザロのよみがえり（ヨハネ 11：1～12：19） 4 日目
 - 第 2 回 イエスの復活（マタイ 28：1～15） 3 日目
 - 第 3 回 二人の証人（黙示録 11：3～13） 3 日半の後＝4 日目
 - ② イエスは、その後も奇跡を行ったが、それは、弟子たちに対してメシアとしての権威を示すためである。イスラエル民族に対してのしるしは、ヨナのしるししか与えられない。
 - ③ それまでの奇跡は、ご自身がメシアであることを示すしるしとして公然と人々の面前で行われた。そのとき、癒しなどを受ける人の側にイエスをメシアとして信じる信仰があるかどうかは、問われなかった。
 - ④ しかし、指導者層による公式の拒否以降は、イエスはもはや公然と奇蹟を行わない。人々の目のつかない場所に移動して行い、かつ、受ける人の側に信仰があることが条件となる。

(2) 教え方に関して

① イエスは、拒否を受けたその日、たとえで群衆に語り始められた。その日のうちに、イエスは5つのたとえ話を群衆に、さらに4つのたとえ話を弟子たちに、合わせて9つのたとえ話を語った。そのテーマは、「**奥義としての神の国**」についてであった。拒否を受けた日から、「奥義としての神の国」の時代が始まった。

今、私たちはその時代に生きている。詳しくは、福岡集会の「奥義」にて。

② イエスが、たとえ話をういた目的は二つあった。

- 目的の第一、弟子たちには効果的に理解させること。イエスは、群衆にたとえで語った後に、弟子たちには意味を解説した。たとえ話に解説が加わることで、「奥義としての神の国」について、あたかもイラスト付きで理解させるような効果がもたらされた。
- 目的の第二、群衆には、たとえ話を語ったところで止めて、「奥義としての神の国」の情報を隠す。

③ メッセージの内容も変わった。それまでは、イスラエルの各地を巡り、町々で、ご自身がメシアであると宣言し、だから神の国は近づいたと説いた。しかし、指導者層による公式の拒否以降は、イエスをメシアであると宣伝することは禁止される（たとえば、マタイ 16:20）。この**沈黙の方針**が撤回されるのは、マタイ 28章 18~20節の大宣教命令においてである。

3. 公式拒否を受けた日、イエスが群衆に教えている最中に、イエスの母と弟たちが来てイエスを連れ帰ろうとした。このとき、イエスは、地上での血縁関係をすべて切って、信者との霊的関係のみを受け入れた。奥義としての神の国が始まったからである。

(1) このとき、イスラエル民族は、神から「わたしの民ではない」（ホセア 1:9）と退けられたのである。奥義としての神の国の時代には、イスラエル民族は、苦しみながらメシアを捜し求める（ホセア 5:15）。他方で、異邦人の中から神の民として救いを受ける信者が起こされる（ホセア 2:23）。

(2) 奥義としての神の国は、大患難期とその直後の諸国民の裁きをもって終了する。大患難期は、神がイスラエル民族の頑なさを砕く「むち」の期間であるが、最後にはイスラエル民族がイエスをメシアとして認めて、民族的救いを受ける恵みの時でもある。イスラエルは再び、「生ける神の子ら」と呼ばれる（ホセア 1:10）。そして「主のすばらしさにおののく」（ホセア 3:5）。「神の賜物と召命は取り消されることがないからです。」（ロマ 11:29）

4. 拒否を受けた日から、弟子たちに対するレッスンが始まった。
 - (1) レッスン1・・・拒否の日の夕方から、日没後にかけて、ガリラヤ湖を舟で航行中に起きた出来事。イエスが風と波を鎮めて、自然を制する力を持っていることを弟子たちに示した。
 - (2) レッスン2・・・向こう岸に渡ってすぐに起きた出来事。悪霊たちがイエスを恐れる。イエスは悪霊たちを制する力を持っておられることを弟子たちに示した。悪霊を追い出してもらって助けられた人には、沈黙の命令ではなく、むしろその人の住む地域で証言するように命じられた。異邦人だったからである。後日、4千人の給食の奇跡につながる。
 - (3) レッスン3・・・対岸から戻ってから起きた出来事である。長血の女の病を癒し、会堂管理者ヤイロの娘を死からよみがえらせて、病と死を制する権威を弟子たちに示した。長血の女、ヤイロ、いずれもイエスを信じる信仰を持っていた。長血の女は密かにイエスの衣の房にさわって癒された。ヤイロの娘のよみがえりに立ち会うことを許されたのは、三人の使徒、ヤイロとその妻、計5人だけであった。
 - (4) レッスン4・・・二人の盲人の目を開き、盲目を制する権威を弟子たちに示した。二人の盲人も信仰を持っていた。群衆の目につく路上ではなく、家の中に連れてきて奇跡が行われた。

5. そして、郷里ナザレでの拒否。以前にもナザレで拒否された事件があった（ルカ4:16～31）。ナザレの人々による拒否はこれで2回目。郷里での拒否が2回起きたように、イスラエル民族の拒否も、2段階で起きた。第一段階は、指導者層による拒否。第二段階は、このあと、民衆レベルでの拒否に拡大する。イスラエルの人々は、イエスを拒否する人々と、信じる人々とに分裂していく。この意味で、郷里での2回目の拒否は、指導者層による拒否が、やがて民衆レベルでの拒否に広がることの予表であった。

6. 今回は、**イエスが十二使徒を国内各地に派遣した出来事**である。その目的は、指導者層の拒否を受けて、これまで宣教してきた各地の人々に、次のことを伝えるため。
 - (1) 指導者層の拒否により、イスラエルは民族的救いを逸した
 - (2) 神の国のプログラムは、「**奥義としての神の国**」のステージに入った
 - (3) 今の邪悪な世代には、裁きが下る（エルサレム陥落、財産や生命を失う）
 - (4) イスラエルの人々は、個人的な救いを受け取るべきである

□拒否を受けての対処 アウトライン

項目	マタイ	マルコ	ルカ
1. 派遣することになった経緯	9 : 35～10 : 4	6 : 6b～7	9 : 1～2
2. 派遣に関する具体的指示	10 : 5～15	6 : 8～11	9 : 3～5
3. 迫害を受けたときの対応	10 : 16～23		
4. 弟子たちも拒否されることを覚悟せよ	10 : 24～33		
5. 弟子たちを拒否するとイスラエルでは何が起きるのか	10 : 34～39		
6. 派遣されてきた弟子たちを受け入れるイスラエルの人々が受ける報奨	10 : 40～42		
7. 派遣出発・その活動	11 : 1	6 : 12～13	9 : 6

□拒否を受けての対処

1. 派遣することになった経緯

- (1) マタイ 9 : 35 *それからイエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病氣、あらゆるわずらいを癒やされた。*

「御国の福音」とは、メシアの王国の提供は、指導者層のメシア拒否により将来の世代に延期されたこと、今は、奥義としての神の国のステージに入ったという内容である。

そして、信仰があることを確認したうえで、病氣やわずらいを癒やした。

- (2) マタイ 9 : 36～38 *また、群衆を見て深くあわれまれた。彼らが羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていたからである。そこでイエスは弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」*

「羊飼いのいない羊の群れのように」・・・群衆はイエスをメシア、すなわちイスラエル民族にとっての真の羊飼い、王であると期待した。しかし、指導者層はイエスをメシアではないと拒否した。群衆は迷い、「弱り果てて倒れていた」

「収穫は多いが、働き手が少ない」・・・収穫とは、イスラエルの残れる者たち、信仰あるレムナントである。イスラエルの民族的救いは遠のいたとしても、神は常にイスラエルの中に、少数の信仰者を残しておられる（レムナント）。少数とはいえ、全体に対しての少数であって、その数自体は大きい。預言者エリヤの時代に、神は 7,000 人の信仰者を残しておられた。それと同じく、この世代のイスラエルの中にも、レムナントがいる。9:35にあるように、そのために町や村をイエスが巡っていた。「働き手」はイエス一人である。そこで、イエスは弟子たちに「収穫の主は、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい。」と命じた。

- (3) マタイ 10:1~4 イエスは十二弟子を呼んで、汚れた霊たちを制する権威をお授けになった。霊たちを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やすためであった。十二使徒の名は、次のとおりである。まず、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモンと、イエスを裏切ったイスカリオテのユダである。

イエスは 12 人の使徒たちを呼んで、悪霊を制する権威をお授けになった。悪霊を追い出すだけでなく、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒やす権威も与えられた。それは、9:35でイエスがしていたことを同じことをする権威を受け、イエスの代理人として、レムナントに御国の福音を宣べ伝えるためである。

2. 派遣に関する具体的指示（マタイ 10:5~15）

- (1) 派遣先は、6 節「イスラエルの家の失われた羊たち」＝レムナント
- (2) 使徒たちが携えていくメッセージは、「天の御国が近づいた」。
- ① 「悔い改めよ、天の御国が近づいた」ではない。レムナントは信者たちである。ゆえに 7 節に「悔い改めよ」は、ない。
- ② 「天の御国」は、奥義としての神の国である。イスラエルの指導者たちがイエスをメシアではないと拒否した日から、奥義としての神の国が始まった。
- (3) レムナントのいる町に行き、レムナントの家で寝食の提供を受けるので、使徒たちは何も持たずに旅に出ることができる。

3. 迫害を受けたときの対応（マタイ 10：16～23）
 - (1) 17～21 節は、将来のこと
 - (2) 22 節は、内容は二つ
 - ① また、わたしの名のために、あなたがた（使徒たち）は、すべての人に憎まれます。
 - ② しかし、最後まで耐え忍ぶ人（紀元 70 年のエルサレム陥落まで迫害に耐えて信仰を持ち続ける人）は救われます（エルサレム陥落に巻き込まれずに、身体的いのちを保ちます）
 - (3) 23 節 「人の子が来るときまでは」 そのときはいつ、どこに？ 解釈は 2 通り
 - ① イエスが紀元 30 年春にエルサレムに入るとき
 - ② イエスが大患難期末に地上に再臨するとき
4. 弟子たちも拒否されることを覚悟せよ（マタイ 10：24～33）
 - (1) 32～33 節は、エルサレム陥落時に生命を失うことからの救い
5. 弟子たちを拒否するとイスラエルでは何が起きるのか（マタイ 10：34～39）
 - (1) 39 節 自分のいのちを得る者（イエスをメシアとは認めず、迫害を受けずにすんだ者）は、それを失い（紀元 70 年、エルサレム陥落に巻き込まれて死ぬ）
 - (2) 39 節 わたしのために自分のいのちを失う者（イエスをメシアとして認めて迫害を受けて死ぬ者）は、それを得るのです（永遠のいのちを得る）
6. 派遣されてきた弟子たちを受け入れるイスラエルの人々が受ける報奨（10：40～42）
7. 派遣出発・その活動（11：1）
 - (1) マルコ 6：12「悔い改めるよう」＝考えを変えるよう・・・どのような考えを改めるべきなのか。それは、指導者たちが主張する「イエスは悪霊憑きである」という考えである。
 - (2) 派遣された使徒たちは、町々で、「イエスは悪霊に憑かれているのではない。確かにメシアである」と伝えながら、神の国のプログラムが新たな段階に入ったことを告げた。